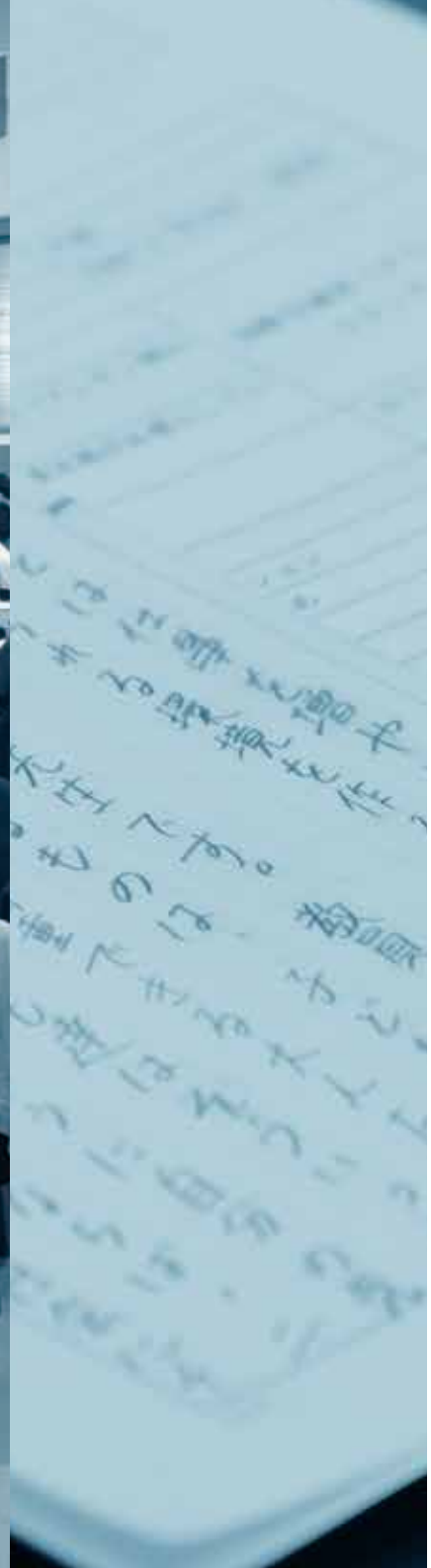
10th
ANNIVERSARY
BEYOND Tomorrow since 2011

BEYOND
Tomorrow

逆境は優れたリーダーを創る

はじまりは、10年前。

2011年の東日本大震災を機に、「被災した若者達を支援したい」という強い想いのもとスタートした私たちの活動が、2021年に10年を迎えました。東北で被災した学生に向けての活動から、のちに支援対象を全国に広げ、困難な立場に置かれた学生達へ奨学金支給や国内外での人材育成プログラムを実施し、様々な形で進学や社会参画を後押ししてまいりました。紆余曲折がありながらも、多くの方のご支援により続いてきたこの10年の活動を振り返ります。



04 | INTERVIEW／近藤正晃ジェームスさん
『逆境を可能に変えて、未来を創る』

06 | HISTORY

10 | 卒業生・関係者座談会
『未来への挑戦は、続いていく』

14 | ビヨンドトゥモローについて
奨学・助成
人材育成
調査・発信

18 | VOICE - 卒業生の声

20 | REPORT／坪内南
『10年間を振り返って』

22 | これまでの成果
プログラム参加者数
奨学生数
寄付額
寄付者数

23 | 役員紹介

INTERVIEW

逆境を可能に変えて、未来を創る

東日本大震災を機に発足したビヨンドトゥモロー。その設立の背景には、どのような人々が関わり、どのような問題意識や想いがあったのでしょうか。設立当時の課題やチャレンジ、ビヨンドトゥモローだけが持つ価値や独自性などについて、創業時に理事として携わり、発足の原動力となった近藤正晃ジェームスさんに当時を振り返っていただきました。

「次世代を担う
子どもたちのために
今できることを。」

近藤 正晃 ジェームス

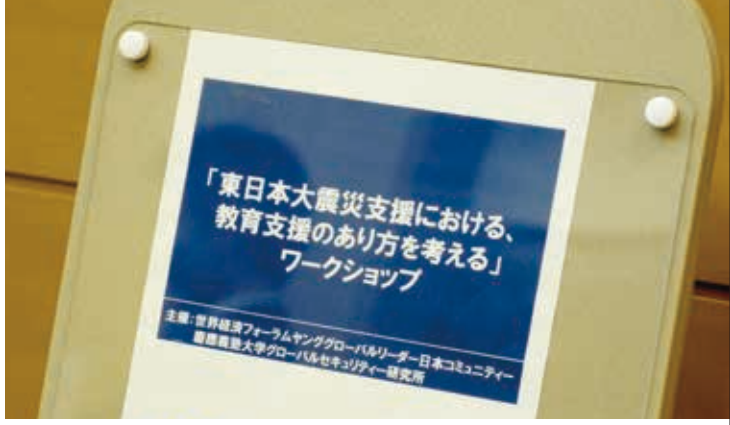
1967年生まれ。90年、慶應義塾大学経済学部卒業。97年、米国ハーバード大学経営大学院修了。2008年、米国イェール大学ワールド・フェロー。ツイッター・ジャパン元代表取締役会長。2011年に一般財団法人教育支援グローバル基金（ビヨンドトゥモロー）発起人となり、2011年から2013年まで代表理事を務める。2019年より公益財団法人国際文化会館理事長。

未曾有の大災害を前に、結束することは自然な流れだった。

東日本大震災から10年。それは同時に「ビヨンドトゥモロー」の活動が10周年を迎えたことを意味しています。一般財団法人教育支援グローバル基金「ビヨンドトゥモロー」が設立されたのは2011年6月。震災からわずか3か月後のことでした。活動10周年にあたり、発起人として、そして創設時の理事の一人として、私なりに改めてあの時のことを振り返ってみようと思います。

震災の発生からほどなく、私は世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダーの仲間と4人で集まり、自分たちに何ができるのか、さまざまな議論をしていました。当時、私はツイッター・ジャパンの代表をしていて、まさにツイッターというものが震災時におけるライフラインとして機能する初めてのケースを経験している最中であり、自分自身もそのことで毎日、大きな影響を受けていました。

物流が滞り、情報もかなり閉ざされている被災地で何が起こっているのか、それに対して我々はどんなことができるのか。情報をかき集めながら議論を重ねていく中で、メンバー全員がもっとも注目したのは被災地の子どもたちのことでした。震災がもたらす影響はどれだけ大きく、どれほどの期間に及ぶのか、その時点では想像がつかないけれど、おそらくそれは巨大であり、非常に長い期間にわたって続いていくものであろうと。そして、そのことに最も深刻な影響を受けるのは、次世代を担う子どもたちなのではないかと。ならば、そこに対してできることをやっていこうということになり、それを実践するための新しい組織を作ることにしました。



当時、私も含めて4人のメンバーはそれぞれに自分の組織を持っていて、それぞれで個別に活動するという選択肢もありました。でも、それをしなかったのには幾つかの理由がありました。一つは、あまりにも大きく衝撃的な出来事が起きている中で、一人ひとりは無力であると感じていたからです。大きな災害が起こった時、人間の衝動の中には、理屈は抜きにして何かをしたいという気持ちが強く起こるものだと思います。しかし、一人の人間ができることは限られている。だからこそ、みんなで結束して活動しようという気持ちになることは、ある意味、とても自然だったのではないかということです。

多くの人が普段は自分のことで精一杯で、他の人のことを考える余裕はなかなかないものです。逆に、みんなで一緒に何かをするのは大変だから、自分のやりたいことを自分がやれるようにやっているのが現状でしょう。ましてや、あの時に集まったメンバーは自分一人でも精力的に動いてきている人たちなので、必ずしも誰かと組む必要はなかったのかもしれません。にもかかわらずみんなで何かをしたいと思うに至ったのは、あの時の4人がほぼ同じような問題意識を持っていた、ということと、それだけ震災の衝撃が大きかったということではないかと思います。

もう一つの理由は、たとえば医療や食料、日用品を届けるとか、私の場合ならWi-Fiを使えるようにして情報を届けるとか、そういった個々のビジネスに直結することではなく、絶対にビジネスでは携われないところにこそ本当に困っている問題があるのだろ

うから、そこをなんとかしたいというのがみんなの思いであったからです。経済原理で解決できる問題とできない問題があり、できない問題の方がとても重要だから、取り組むのであればそちらにしたい、と思いました。そしてそのためには仲間をもっと増やし、組織をある程度の規模にしたいという思いで、知り合いに次々と電話をかけていきました。趣旨を説明し、賛同してくれる人にはお金もすぐに出資してもらうようにして、最終的に20人弱の人数が集まって、「ビヨンドトゥモロー」の最初の基盤を作ることができました。

どんなに素晴らしい思いつきであっても、その活動が長く続いていかないと意味がありません。持続的なものにしていくために、ある程度の数の賛同者を集めることと、さらに、その人たちの意識をつなぎ続けておくことの必要性を強く感じていました。まずは活動をスタートさせて、並行して資金を集めていけばいいのではないかという考えも浮かびましたが、たとえば事務局のスタッフになった人が、自分の初年度の給料と活動資金の両方を集める仕事をするというのは、やはり現実的ではないと思いました。その意味でも10年前のあの時は、ありがたいことにしっかりとスタートから全力疾走できる資金を集めることができたと思っています。参加メンバーの意識が高い時に前倒しで資金を集めるということの重要性は、その後の私自身のほかの活動においても、さらに今でも、強く感じていることです。

子どもたちが経験した困難は、未来に向けての大きな財産になる。

基盤ができたところで、事業として具体的にどんなことをするのかについては、大きく二つの発想がありました。一つは、子どもたちの失われてしまった故郷にできるだけ近いところで、完璧な現状復帰は無理でも、できるだけ早く元の生活と同じような環境に戻すための手助けをするということ。そしてもう一つは、それだけの大変な経験をした子どもはおそらく普通の人間が経験することがないほどの問題意識や共感力をもつことができるだろうから、元の生活に戻ることを出口にするのではなく、むしろ将来に向けて、これまでとは違う環境であってもその子が活躍していくことができるような支援をしていこう、ということでした。我々は後者を選びました。

困難を経験した子どもたちは、もしかしたらその経験を、将来、それぞれが社会に力を添える存在となるエネルギーにしていけるのではないか。そのようなポテンシャルがとても高いのではないか。だからそこを追求していきたい、と思ったのです。また、私の周りに集まった人たちの多くが、自分たちの才能や努力とは別に、さまざまなきっかけや機会があって現在の自分がある、という共通の思いを持っていたこともあり、そうであれば私たちは子どもたちにそのような機会を与えていく機関を作ることができるのではないかと思いました。そして、きっとそこには日本と世界という視点も大事な要素になってくるだろうと。それで、国際的に活動されている坪内南さんの指導力に期待して、彼女に声をかけ、組織に加わっていただきました。

「ビヨンドトゥモロー」のこれまでの活動の中でも、人材育成プログラム、特に体験学習は、初期の頃からこの組織の独自性をよく表していたのではないかと私は思っています。生徒や学生たちとの接点が年に何回もあるのは非常に珍しいことで、一人ひとりに身近でホームメイドな雰囲気で行われている。これは10年間ずっと引き継がれている大きな特徴だと思います。

この10年を振り返ってみて、「ビヨンドトゥモロー」は世の中を先取りしていたのではないかと思うことがあります。というのも、日本でこの10年の間に起きたことを考えてみると、格差や機会の不平等、子どもの貧困などの問題が珍しい事象ではなくなり、むしろそれが現代社会のかなり根幹的な問題になっているのではないでしょうか。つまり、困難な状況にある子どもたちは増え続けているのです。しかし、そんな子どもたちに対して社会はどのような対応をしているかというと、たとえば子ども食堂や、学校に通うための奨学金制度など、なんとか格差を是正して社会の平均のところを補完してあげようという議論は数多くあるものの、そのような体験をした子どもだからこそ、違う環境をセットすることで、社会の価値創造のためにより飛躍できる存在になるという議論はまだ少ないような気がします。

そう考えてみると、「逆境は優れたリーダーを創る」という理念を掲げ、10年間、果敢に活動に取り組んでいる「ビヨンドトゥモロー」は大きな野望を持った珍しい組織なのかもしれません。日本国内だけでなく、今の世界のあらゆる格差や不平等、迫害の被害者も含めて、将来は活動の対象になり得るのかもしれません。むしろそうなってほしいと僕は思っています。世界に目を向ければ、難民キャンプにもさまざまな境遇の子どもたちがいます。そこでは日本とは全く違ったことを考え、対応していかなくてはならないでしょう。この10年間の学びを糧に、「ビヨンドトゥモロー」の活動はそのような場面でもすごく貢献できると思うし、これからもますます期待しています。

HISTORY

10年間で、ビヨンドトゥモローは様々なチャレンジを乗り越え、成長してきました。国内・海外研修の実施、支援対象の拡大…様々な学びの機会提供を通し、困難な環境でも学びを続けたいと願う若者達に寄り添い、自らの道を選択する過程を応援してきました。

2011

●創業

6月に財団設立。初の活動として、2011年9月に中国・天津で開催された夏季ダボス会議に、東日本大震災で被災した学生7名が参加し、震災の体験を世界に発信した。10月には初めての東北未来リーダーズサミットを東京で開催し、被災地から70名の高校生が集い、東北の未来のために自分ができることを考え、提言にまとめました。

- ●夏季ダボス会議参加
- ●東北未来リーダーズサミット開催

2012

EPISODE 実際に学生を迎え入れることで、これまで議論を重ねた支援の在り方、「共感力ある次世代のグローバル・シティズンの輩出を目指す」という事業構想が形になりました。

●アメリカへの広がり

東北未来スカラーシップ・プログラムを開始し、初めての奨学金支給を開始。春には初めてのグローバル研修「米国スプリング・プログラム」を開催。被災地の学生たちがアメリカの地を踏み、東北復興の現状を伝えた。また、アメリカの方々からの支援に感謝を伝え、アメリカ社会について学びました。

- ●米国スプリング・プログラム
- ●TOMODACHI 米国サマー・プログラム ～復興とまちづくり～
- ●米日カウンシル年次総会参加
- ●東北未来リーダーズサミット
- ●気仙沼プログラム
- ●高校留学プログラム開始
- ●大学奨学金プログラム開始

2013

●ヨーロッパへの広がり

夏季グローバル研修にて「ビヨンドトゥモロー欧州サマー・プログラム2013 ～フランスとドイツで学ぶ、多様性とリーダーシップ～ 」を実施。東北の学生達が両国を訪れ、多様性について学びました。

- ●TOMODACHI ビヨンドトゥモロー・ グローバル・リーダーシップ・アカデミー
- ●欧州サマー・プログラム
- ●TOMODACHI 米国サマー・プログラム ～アメリカで学ぶ、社会変革（ソーシャル・チェンジメーカー）～
- ●東北未来リーダーズサミット

●アジアへの広がり

夏季グローバル研修で台風30号により甚大な被害を受けたフィリピン・レイテ島を訪問。被災地出身の若者たちと共に、被災体験を共有し、今後のアジア地域の災害リスクの軽減のために自分たちに何ができるかを協議しました。

2014

- ●TOMODACHI ビヨンドトゥモロー グローバル・リーダーシップ・アカデミー
- ●スプリング・プログラム　第1、第2ステージ
- ●アジア防災閣僚級会合参加
- ●アジアサマー・プログラム
- ●米国サマー・プログラム
- ●欧州サマー・プログラム
- ●アジアでの災害リスク管理を考える「HANDs プロジェクト」開催
- ●東北未来リーダーズサミット

●全国学生との出会い

初めて参加対象を日本全国に広げ、ジャパン未来リーダーズサミット2015を開催。日本全国を代表する高校生たちが、日本の未来、世界の未来についてディスカッションを行い、提言をまとめました。

2015

- ●「HANDs プロジェクト」第2フェーズ
- ●TOMODACHI ビヨンドトゥモロー グローバル・リーダーシップ・アカデミー
- ●スプリング・プログラム
- ●国連防災世界会議 パブリックフォーラム参加
- ●アジアサマー・プログラム
- ●米国サマー・プログラム
- ●東北・ジャパン未来リーダーズサミット

2016

●全国展開

ビヨンドトゥモローにおいて一番の転機となったのがこの年。これまでの東日本大震災で被災した学生という支援対象の枠組みを、日本全国の学生に広げました。そこには、逆境は自然災害だけでなく、社会経済的に恵まれない環境にいることで、進学をあきらめざるを得ない状況も、人生を困難にする逆境であるという考えがありました。

EPISODE

全国展開したことで、震災だけでなく、全く別の辛さを抱える学生達との出会いがありました。それまでは、過去の自分の体験を話す時間は、震災の体験がメインでしたが、虐待や親との死別・離別などの過去を持つ学生とのストーリー共有もあり、当初、参加者同士の戸惑いはあったと思います。しかし、体験を共有する中で、困難の要因は様々であっても、痛みを持つ者同士だからこそ通じるものはあると感じました。「痛みの大きさは比べるものじゃない」という先輩の言葉に救われたり、自分だからこそできることを考えたり、国内の社会問題について発信したり、ということで感情を整理したと同時に、仲間との出会いで多くの学びを得ることができました。（稲村ほのか）

- ●橋本大二郎が代表理事に就任
- ●米国サマー・プログラム
- ●アジアサマー・プログラム
- ●ジャパン未来リーダーズサミット

2017

●エンデバー、ジャパン未来スカラーシップ・プログラムを開始

児童養護施設に暮らす高校生を対象とした年間プログラム「エンデバー」をスタート。虐待やネグレクトから保護され、児童養護施設に暮らす日本全国の高校生を対象とし、奨学金支給および人材育成プログラムへの参加機会の提供が始まりました。また、親との死別・離別や、児童養護施設や里親家庭に暮らすなどの困難を経験した日本全国の高校卒業者を対象に「ジャパン未来スカラーシップ・プログラム」を開始。奨学金支給および人材育成プログラムへの参加機会の提供が始まりました。

2018

●三重県での活動

米国やアジアでの研修に加え、国内での活動として、三重県でのフィールドワークを実施。三重県の児童養護施設に暮らす中高校生が将来を主体的に考えるためのワークショップや、三重県庁での提言発表を行いました。

●オリエンテーション・プログラム
●スプリング・プログラム
●エンデバー　サマー・リトリート
●米国サマー・プログラム
●ジャパン未来リーダーズサミット

●オリエンテーション・プログラム
●エンデバー クロージング・プログラム
●アジアサマー・プログラム
●米国サマー・プログラム
●エンデバー サマー・リトリート
●ジャパン未来リーダーズサミット

●コロナ禍での挑戦

新型コロナウイルスにより、多くの活動がオンライン中心に。学生達とどのように意味のあるプログラムを実施するか工夫が求められ、また、アドボカシー（政策提言や発信活動）の重要性が高まる一年となりました。

2020

EPISODE

コロナ禍で、急遽取り入れたオンラインプログラムですが、全国にいるメンバーがより頻繁に顔を合わせ、交流できるようになったという面もありました。アフターコロナにおいても、オンラインプログラムの活用は、人材育成プログラムの重要な方法の一つになり得ることがわかりました。

2021

●10期生となる奨学生の輩出

コロナ禍で対面での機会を失った学生達のため、昨年参加の学生に継続してプログラム参加の機会を提供し、新規参加生も募集。オンライン、対面でのプログラムを発展させる、新たな一年をスタートさせます。

●フェローシップ・プログラム開始

ジャパン未来フェローシップ・プログラム開始。ビヨンドトゥモローのプログラムに参加した学生が、財団の活動運営に参加し、自身が担い手となるサイクルの構築に着手しました。

2019

- ●オリエンテーション
- ●エンデバー｜クロージング・プログラム
- ●キャリアセッション
- ●アジアサマー・プログラム
- ●米国サマー・プログラム
- ●エンデバー サマー・リトリート
- ●ジャパン未来リーダーズサミット

- ●オリエンテーション・プログラム（3月、5月）
- ●エンデバー、スカラー、フェローへのマンスリーオンラインプログラム
- ●イヤーエンド・ギャザリング

- ●エンデバー、スカラー｜クロージング・プログラム
- ●オリエンテーション・プログラム
- ●スプリング・プログラム
- ●アドボカシーの実践として、調査・発信プロジェクトをスタート

未来への挑戦は、続いていく

「ビヨンドトゥモロー」の発足から10年。これまで私たちは、多様な価値観が共存する社会の実現を目指し、逆境を経験した多くの若者たちを応援してきました。10周年をひと区切りに、改めてそれぞれの立場からこれまでの「ビヨンドトゥモロー」の歩みを一緒に振り返っていただきます。集まってくださったのは、私たちの挑戦に参加し、共に歩んできてくれた現役生の稲村ほのかさんと卒業生の藤田真平さん。そして、評議員の山崎直子さんとアドバイザーの竹中平蔵さんにも加わっていただきました。

ビヨンドトゥモロー 2012年~2015年次年間プログラム参加学生/宮城県気仙沼市出身。神奈川県立岸根高等学校卒業。神奈川大学法学部卒業。5歳から水泳を始め、全国優勝の経験があり高校卒業後は神奈川大学体育会水泳部に所属し主将を務めた。現在は株式会社エンカリディアーゾに所属、俳優・タレントとして活躍。

宇宙飛行士/東京大学工学部航空学科卒業、東京大学院航空宇宙工学専攻修士課程修了。2010年、スペースシャトルに搭乗し、国際宇宙ステーション(ISS)組立補給ミッションに従事。2011年にJAXAを退職。内閣府宇宙政策委員会委員、日本宇宙少年団(YAC)アドバイザー、出身地の松戸市民会館名誉館長等を務める。

慶應義塾大学名誉教授・東洋大学教授/一橋大学経済学部卒業後、日本開発銀行入行。2001年、小泉内閣の経済財政政策担当大臣就任を皮切りに金融担当大臣、郵政民営化担当大臣、総務大臣などを歴任。政界引退後、㈱パソナグループ取締役会長、オリックス㈱社外取締役などを兼職。

ビヨンドトゥモロー 2015年~2021年次年間プログラム参加学生/宮城県亘理郡亘理町出身。宮城学院高等学校卒業。上智大学外国語学部在籍。高校生の時、ボリビア・サンタクルスの「コレヒオ・フランコ・ボリビアーノ」に留学。大学生の時にコロンビア・ボゴタの「ハベリアナ大学」に留学経験がある。

震災の体験を話すことができず心に不安を抱え続けた日々

―「ビヨンドトゥモロー」の活動が始まったのは、東日本大震災という大きな危機が起こったことがきっかけでした。まずは10年前の3月11日のことをお伺いします。あの日はどこで、何をしていらっしゃいましたか？

稲村　私は当時、宮城県仙台市にある中学校の一年生で、地震が起きた時はホームルームの最中でした。すぐにみんなで校庭に避難して、その後で校内のホールへと移動しました。しばらくして家族と連絡が取れて、その時に祖父が「家が流された」といっていたのですが、私にはどういう意味なのかわかりませんでした。学校は私の家から数十キロ離れた内陸部にあるので、津波が起きたことをすぐには認識できなかったのです。でも、父が迎えに来て、「帰る場所がないから、今日は学校に泊まろうね」と言われた時、あ、本当に家が流されちゃったんだと思いました。翌日から親戚が経営する居酒屋の店内で数日を過ごし、その後は私と双子の妹が別の親戚の家に移り、親と離れた生活が続きました。

藤田　僕は宮城県気仙沼市の高校2年生でした。あの日は午前中に学校で終業式の予行練習をして、その後、水泳部の練習に行く前にいったん家に帰っていました。地震が発生した時、すぐに僕の頭に浮かんだのは2日前の地震のことでした。3月9日に三陸沖を震源地とする最大震度5弱の地震があり、その時は津波は来ませんでした。だから今回も揺れるだけで終わるだろうと思っていたのです。でもさらに大きい揺れが来て、その後に大津波警報が発令され、とんでもない事態になったんだと思いました。

−高台などに避難されたのですか？

藤田　僕の家は海から100メートルも離れていない場所にあったので、父と弟と祖母と一緒に車に乗り込んで高台を目指しました。でも、道は一本道で信号も止まっているので大渋滞になり、周りはクラクションと怒号の嵐。このままでいたら流されてしまうと父が判断し、自宅近くのビジネスホテルに避難しました。それから津波が来て、街が流され、フェリーや重油タンクも流れていって唖然としていたのも束の間、僕らが逃げ込んだホテルの対岸の造船所から火の手が上がり、それが次々と周りに移って内陸まで侵入し、あちこちで火事になりました。避難したホテルは7階建てでしたが、流された家が3階部分に突っ込んできたりしていたので、いつ周りの火が燃え移ってくるのかもわからない状態で……、その夜は消火器を抱いて寝ました。

−お二人とも、私たちの想像を絶する大変な不安の中にあったことと思います。東京の竹中さんと山崎さんの、あの日の記憶はどのようなものですか？

竹中　私は地震の発生時、慶応大学の所長室におりました。自分は和歌山県の出身で、子供の頃から地震には慣れているつもりでしたが、あの時の揺れは私の人生で最大の衝撃でした。館内放送で「とにかく建物の外に出て」といわれ、出たらキャンパス内は人であふれかえっていました。駐車場に置いていた車は無事だったので家に帰ることにして、いつもなら20分の道のりを約1時間半かけて帰り着くと、マンションのエレベーターが停止していました。大学の所長室には水と毛布をいくらか置いてあったので、帰宅できない人のために部屋を解放し、使ってもらいました。

山崎　私はちょうどアメリカから日本に帰国していて、小学生の娘の授業参観中に地震が起きました。生徒たちはとりあえず机の下に隠れて、揺れが収まってから解散になりました。夜まで停電が続きましたが、インターネットが復旧してから、いろいろな人と連絡を取りながら状況を見ていました。その夜に私が思い出していたのは2001年の9・11アメリカ同時多発テロの時のことです。当時は訓練でロシアにいて、ニュースを知った時はものすごい衝撃を受けました。それと同じような感覚が蘇ってきて、福島には原発もありますし、これは大変なことになっていくのではないかと思ったのを覚えています。

−稲村さんと藤田さんは故郷がそれまでと全く違う状況になっていくなか、どのような思いで過ごしていたのでしょうか。

稲村　私が通っていた中学校には県内外のさまざまな地域から生徒が集まっていて、同級生の大半は津波による被害を受けていませんでした。震災後に友達から次々と携帯にメールが来て、「大丈夫？」と聞かれていましたが、大丈夫じゃないのは私だけでした。他のみんなは普通に勉強を続けることができていたけれど、私は地震の日に手元にあったもの以外はすべて失くしてしまい、何もできない状態が何日も続いて……、このままでは置いていかれる、という不安にさいなまれる日々でした。

−同じ体験を共有できる存在が身近にはいなかったのですね。

稲村　学校が再開して、アルバムを作るので昔の写真を持ってきてくださいと係の人からいわれ、私はこういう事情で昔の写真がないので、と伝えると、「あ、暗くなるからそういう話はやめて……」という雰囲気になるんですね。もちろん相手に悪気はないのですが、私としては「震災のことは話せないんだな」と思ってしまって……。妹もいるし、自分は姉だからしっかりしないといけないという気負いもあったのか、家族に対しても“辛い”という言葉を口に出せないところがありました。

藤田　僕も家は失くしたけれど家族は全員無事だったので、身内を亡くした友達の話を聞くと、自分はなんて儲け者なんだろうと思わずにはいられませんでした。知人の家に居候させてもらい、屋根のある場所で生活することもできる自分は幸せだと思い、逆に周りの人のために何ができるのかを、日々、模索していました。

−その後、藤田さんには一つの転機が訪れましたね。

藤田　小さい頃からずっと水泳を続けていたのですが、被災地に水が供給されないなかで、水泳をしたいなんてことはとても口に出せなくて……。ある時、出会った新聞記者の方に「今の気持ちを書いてみませんか」と勧められ、記事と共に「泳ぎたい」とメッセージカードを持った写真が掲載されました。するとそれがきっかけで、神奈川県の高校に大学進学を前提とした転校をすることができたのです。本当にありがたいことでした。ただ、被災者が一人もいない環境に単身で転校して、周りの人も僕に気を遣ってくれているのがわかったので、震災のことは何も話さないほうが周りとうまく付き合っていける、ということを常に感じながら過ごしていました。

痛みを共有できる仲間との出会いで新たな一歩を踏み出すことができた

−稲村さんと藤田さん、それぞれのビヨンドトゥモローとの出会いはいつ、どのようなものでしたか？

稲村　私は2013年、高校1年生の時に東京で行われた「東北未来リーダーズサミット」に参加しました。被災した人たちが集まる場所に行ってみたいという思いがあったからです。もともと人見知りということもあり、初めて会う人達と体験を共有することに最初は驚きや戸惑いもありましたが、話をするうちに自然と涙が出てきて、自分でも驚きました。それまで震災のことで泣いたことはほとんどなくて、辛いことはないと思い込んでいたのですが、そこで初めて、ああ、本当は辛かったんだ、ということに気づくことができました。その後は、少しずつ震災の体験を自分から周りの人に正直に話したり、感情を表に出すことがらくにできるようになりました。

あの時、ビヨンドトゥモローと出会ったことで、初めて震災を乗り越えることができたのだと思います。

藤田　僕は震災から半年後に実施された第一回目の「東北未来リーダーズサミット」に参加したのが最初でした。東北発のリーダーになるというサミットの趣旨に惹かれたのです。そこには自分が見ていた震災とはまた全然違う経験をした人たちが集まっていて、それまでの人生で、あの時ほど人の話を染み入るほど聞いたことはなかったです。自分の経験もしっかり人に聞いてもらえるという安心感に包まれたような感覚があり、僕の経験を話すことで、救われたとか、気づきがあった、といってくれる人もいて……。あ、自分は喋っていいんだ、転校してから一人で抱え込んでいたこともさらけ出していいんだ、と思うと嬉しかった。同じ経験をした人たちと話すことで素直になれたのだと思います。

－竹中さんはダボス会議に学生たちを派遣して、被災地の状況を世界に発信してくださったこともありました。

竹中　あの時、ある女子高校生がご自身の体験をスピーチしてくださったのですが、それがとても感動的なお話でした。スピーチの後でスイスの大企業の社長さんが私のところに来て、「辛い経験をした高校生がこのような素晴らしい発信をすることができる日本という国は、これからも絶対に大丈夫だ」と励ましてくださったことを思い出します。私たちも若い人たちにさまざまなことを教えられた貴重な経験でした。

私は、今の時代には3つのキーワードがあると思っています。それは「スマート」、「サスティナブル（＝持続可能な）」、「インクルーシブ」です。AI（人工知能）などのスマートテクノロジーを駆使して地球環境の持続可能性を実現していくことはとても重要ですね。そして、もう一つがインクルーシブ。「包括的な」とか「幅広く全体を含んでいる」という意味ですが、つまり“みんなにいき渡らなくてはいけない”ということです。そのインクルーシブの原点が、困難を経験した若い人たちに新しいチャンスを与えることなのではないでしょうか。なかなか実践するのは難しいものですが、それをビヨンドトゥモローではこの10年間、しっかり続けてこられた。素晴らしいことだと思います。

－山崎さんにも初期からビヨンドトゥモローの活動に関わっていただき、ご自身の宇宙での経験をもとに、学生たちにさまざまなお話をしてくださいました。

山崎　私がオファーをいただいたのは、東日本大震災から約2か月後くらいでした。最初にビヨンドトゥモローの理念や活動内容の話を聞いた時、なんと一人ひとりに寄り添ったプログラムなんだろうと感動したのを覚えています。さまざまな困難を経験してビヨンドトゥモローに参加してくる若者たちの一人ひとりが力強く育っていくことこそが、これからの日本にとっての財産だという信念のもとに活動されている姿にとても共感しました。

自分が経験した辛いことを人前で話すのはとても難しいことだと思います。でもそれを客観的に捉えてきちんと発信することができるのは本当にすごいことです。それはきっとお二人が話していたように、ビヨンドトゥモローの活動に関わって、自分が発信していいのだという信頼感があるからこそできること。一人ひとりがいかにすばらしい人であっても、そのような環境がないと有効にできないことだと思います。

－稲村さんは、ビヨンドトゥモローのプログラムを通してどのようなことを感じてきましたか。

稲村　大学生になって、サミットでリーダーを担当したことがありました。その時に、人と比べるのではなく、自分の歩調に合わせてやればいいんだということがわかったような気がしました。私は仲間をぐいぐい引っ張っていくリーダーではないけれど、後ろから支えるような、そんな自分なりのリーダーシップを見つけることができたのは嬉しかったですね。

また、サミットの参加対象が日本全国に広がって、それまでに出会ったことがないような、さまざまなバックグラウンドの学生たちと出会うことができたのも大きなメリットでした。私は震災を経験しましたが、勉強を続けることができたし、留学したいといったら行かせてもらうこともできました。あまり苦労せずに生きてきたせいか、人に対する共感力がほとんどなかったようです。留学ができるのも自分の努力の結果だと思い込んでいたのですが、じつはそうではなくて、ある意味、下駄をはかされていることに気づいていなかったのだと初めて思い知りました。そのようなことを経て、徐々に共感力をもって社会のさまざまな問題に目を向けることができるようになった気がしています。

－稲村さんは高校と大学で海外留学を経験していますね。

稲村　高校生の時はボリビアに、大学生の時はコロンビアに留学しました。高校生の時は自分から行動することができなかったのですが、その後、ビヨンドトゥモローの活動でディスカッションをしたり、人前で発表したりすることを積み重ねていたおかげで、大学生の時は自分から積極的にコミュニティに飛び込むことができ、交渉して住む場所を寮からホームステイに変更してもらったこともありました。自分で考えて行動し、意見をいうことができるようになったのは大きな成長だなと……。今は就職活動中で、インターンシップに参加した時なども、同じようなことを感じています。

ー藤田さんはビヨンドトゥモローとの出会いが、その後の人生に影響していると思うようなところはありますか？

藤田　ビヨンドトゥモローのプログラムを通して、“できないことはない”ということを何度も感じさせられました。初めてリーダーズサミットに参加した時は、話したことのない人と話してみようと思って話をし、寄り添って、理解し合って、一緒に提言を作成する機会を作ってもらいました。翌年にはチームリーダー、その後は運営担当と、どんどん自分のフェーズを上げていただきました。ビヨンドトゥモローの活動に参加している時は、水泳選手というよりも一人の人間として成り立っている気がしました。

アメリカのシアトルで開催された米日カウンシルの会合や、タイで行われたアジア防災閣僚級会合にも参加して、発信させていただきました。シアトルではまだ英語をほとんど話すことができなかったにもかかわらず、英語でスピーチを任されました。タイの会合に参加した時は、僕だけが他の皆さんよりも遅れて合流することになり、朝の4時過ぎに空港からバンコク市内のホテルまで、土地勘もなく、つたない英語でタクシーの運転手に必死に説明しながらなんとかたどり着いたということがありました。そのような経験のおかげで度胸がついて、その後、個人的に震災の語りべを始めたんです。企業を回ったり、地方に行って学校の授業で話をさせていただいたり……。毎回、アンケートの感想を読みながら、震災について自分一人で抱えていた事柄でも、じつは知りたい人もたくさんいるのだとわかり、自分の教訓を多くの人にシェアして、将来の備えにしてもらえたらいいなと思いました。

竹中　関東大震災の直後に帝都復興院の総裁となった後藤新平は、震災で何が起こったのかをまとめて英語の本にしました。その前文には「震災の時に我々は世界の方々から助けてもらった。その恩返しとして我々にできることは、我々が行った震災対応の良いことも、失敗も、すべてをちゃんと伝えることだ」ということが書かれていたそうです。私も東日本大震災の後に「大震災の教訓」というセミナーを開催し、専門家の方々と新しい危機管理の観点から分析・議論を行いました。そして、その内容をまとめた本を作りました。稲村さんや藤田さんが発信されているのと同じように、震災の教訓を残し、伝えることは大切ですね。

力強く
しなやかな復元力で
未来を創っていく

竹中　ビヨンドトゥモローの理念にもあるように、逆境は優れたリーダーを創る一つの重要な要素であると私も思います。今のコロナ禍もそうですが、カオスというのは人間や社会が持っている強さと弱さの両方をさらけ出すものです。MITメディアラボ（米国マサチューセッツ工科大学の研究所）がアフターインターネットの時代を表した言葉の中に「レジリエンス・オーバー・ストレングス／強さよりも復元力が大事だ」というのがあるように、強い会社であっても壊れることはあり、それを復元する力が大切なのです。大震災も同じです。強い復元力があれば再生することができる。困難を体験した若者も、弱さを是正して強さを生かすようにすれば、リーダーを創り出すことができると思います。

山崎　宇宙飛行士になる時の試験では、「これまでにどのような逆境を体験して、それをどのように乗り越えてきましたか」ということを必ず聞かれます。人の中にあるレジリエンスも大切で、何かが起こった時にこそ人の真価が発揮されるということなので、その時にどう対処したか、が重要になってきます。また、宇宙飛行士の訓練は野外で行うこともあるのですが、みんなでチームになって、役割分担をしながら助け合わないと生活できない環境の中で、あえて過ごします。そして、毎日リーダーを交代するのです。そうすることによって、自分の内面に新しい気づきがあったり、自分以外の人の新しい一面を知ったりと、お互いに自分の殻を破ることができる。そのようなことで、あえて違う環境で、いつもと違う役割を担うことが重んじられているのです。逆境というのはおそらくその最たるもので、日常とまったく違う環境の中で、自分はどんな役割を担えるのか、心の底から考えた人は、そのことがものすごく強みになるのではないかと私は思います。

ーでは、若者お二人の今後の展望をお聞かせください。

稲村　現在、就職活動中なのではっきりしたことはまだわかりませんが、人の問題を当事者として考えられるような共感力のある社会を目指したいと思っていて、教育業界やPR業界でそれを実現していくことができたらいいなと思っています。

藤田　僕は今、芸能の仕事をさせていただいているのですが、多くの人に支えてもらって今の自分があるのだということを日々、強く感じて、感謝の気持ちでいっぱいです。この先はどうなるのか、正直まだわかりませんが、やれるところまでやってみたい。一番目指しているのは、経済を動かせる俳優になることです。

竹中　古希を迎えた私がみなさんに言いたいのは、人生意外と短いぞ、ということです。本当に自分がやりたいことをとことん追求していってほしいですね。

山崎　今の時間を精一杯楽しんでほしいなと思いますね。世界はみなさんが思っているよりもっともっと広いし、好奇心と共感力を忘れずに、どんどん外に出ていってほしいと思います。

ー本日は、どうもありがとうございました！

（文・牧野容子）

ミッション

困難を経験した若者が共感力ある人材として成長し、
社会の各所で活躍することで、寛容な社会を実現する。

ビヨンドトゥモローの価値観

1 短期的な弱者救済を目的とせず、
時代や地域を越えて多様な価値観が共生する社会の実現を志す

ビヨンドトゥモローの目的は個々の学生の支援にとどまりません。
彼らが将来、それぞれの道で輝くことで、困難を経験した人の価値観が反映される社会の実現を目的としています。

2 挫折や失敗を含む多様な生き様を尊重

若者たちが前に進んでいく過程においては、失敗や挫折があり、その経験が人を成長させます。ビヨンドトゥモローは、それぞれが安心して失敗できる環境を提供していきます。

3 困難な経験は共感力をはぐくむ上での糧であり、
逆境にある若者は弱い存在ではない

ビヨンドトゥモローが逆境にある若者を応援するのは、彼らがかわいそうな存在だからではありません。それまでの困難は負の出来事ではなく、大切な財産であると考えています。

4 社会の各領域のステークホルダーの知見を結集

目指す社会の実現のためには、幅広い領域における知見や、領域を越えた連携が重要になります。あらゆる領域のステークホルダーが連携することで、ビヨンドトゥモローの活動が社会にもたらすインパクトの最大化をめざします。

対象とする若者

- 親との死別・離別を経験している
- 児童養護施設・里親家庭に暮らしている
- 生活保護受給世帯に暮らしている

事業の全体像

逆境にある若者に対して
チャンスの提供

奨学・助成

人材育成

生活環境において困難を経験した若者が、人の心の痛みに想いをはせる資質をもつ人材として社会の各所で活躍するようになる。

社会に対して
アドボカシーの実践

調査・発信

課題や挑戦について広く発信し、社会を構成する人々が、逆境にある若者が社会で活躍することの意義を理解し、行動できるようになる。

↓

弱い立場におかれた当事者の視点が反映された
多様な価値観が共生する社会

奨学・助成

親との死別・離別や、虐待・ネグレクトからの保護などの困難を経験しながらも、将来、社会に力を添える志と資質を持つ若者を選抜し、進学のための返済不要の奨学金を支給しています。

活動内容

エンデバー

児童養護施設などの社会的養護施設および里親家庭に暮らす高校生のための奨学金プログラムです。大学進学に際し受験準備費用を支給するほか、年間のプログラム開催を通し、広い視野から主体的に高校卒業後の進路を選択する道のりを応援します。

対象となる学生

- 児童養護施設などの児童福祉施設・社会的養護の施設に暮らしている
- 里親家庭に暮らしている
- 応募時点で高校1年次、または2年次に在籍している

ジャパン未来スカラーシップ・プログラム

親との死別・離別を経験している、児童養護施設・里親家庭・生活保護受給世帯に暮らしているなどの学生を対象に、大学・短大・各種専修学校に進学する際の返済不要の奨学金支給を行っています。

対象となる学生

- 高校を卒業見込みである、または高等学校卒業程度認定試験に合格する予定である
- 大学・短大・各種専修学校に進学予定である
- 下記いずれかに該当している

1.親が亡くなっている / 2.単親家庭である（母子家庭、父子家庭など） / 3.児童養護施設などの児童福祉施設・社会的養護の施設に暮らしている / 4.里親家庭に暮らしている / 5.生活保護受給世帯に暮らしている

奨学・助成を受けた背景

農家に生まれ育ち、小学生の時に家族を支えてくれた父が自死。
日本語を話すことができない母を新聞配達で支える貧しい生活の中、
自分は幸せになってはいけないのだと思っていた。
（山口県/大学生）

家庭で暮らしていた時は生活保護を受けていたので、
大学進学なんて考えもしなかった。
（神奈川県/大学生）

どうしても、学校に行きたかった。
学校に行くことが許されなくなった時、私は家を出るという決断をした。
翌日、アルバイトに行くと嘘をついて家をでて、
学校の先生に助けを求め、私は一時保護され児童養護施設に来た。
（岐阜県/短大生）

人材育成

特定の能力を育成することを目的とするものではなく、困難を経験した若者たちが、その経験を糧に成長し、他者の心の痛みに想いを馳せる「共感力」をもって行動できる人材として、社会の各所で花を咲かせるまでの過程を応援しています。

3つのアプローチ

人材育成プログラムを実施する上で、ビヨンドトゥモローは「仲間との対話」、「自分に何ができるか」、「視野の広がり、世界への挑戦」の3つを重要視しています。

仲間との対話

学生たちが自身の経験を安心して話せる環境を提供しています。仲間との信頼関係構築の経験が、その後の人生を切り開く上での財産となっていきます。

自分に何ができるか

社会課題の解決に向けて自分に何ができるかをまとめて発表したり、自分たちが考えた企画を実践する機会を提供しています。様々な領域のゲストを招いての提言発表会、ビヨンドトゥモローの活動を企画・実践するタスクフォースなど、「自分に何ができるか」を実践的に学ぶ過程を重視しています。

視野の広がり、世界への挑戦

キャリアについての視野を広げたり、国内外の社会課題を学ぶために様々な領域で活躍するリーダーの話をきいたり、海外に足を運んで世界について学ぶなど、社会とのつながりを大切にしています。

活動事例

地域

日本国内に実在する社会課題に目をむけ、宿泊型研修プログラムや、地域でのフィールドワークなどを行っています。例年開催する「ジャパン未来リーダーズサミット」では、様々な領域で活躍するリーダーたちのアドバイスの下、今の日本における社会課題をテーマに、グループ毎に提言をまとめます。さらに、このようなプログラムでまとめた提言を、各界のリーダーへ直接提言発表する機会も提供しています。

- ●ジャパン未来リーダーズサミット
- ●ビヨンドトゥモロー スプリング・プログラム
- ●オリエンテーション　他

グローバル

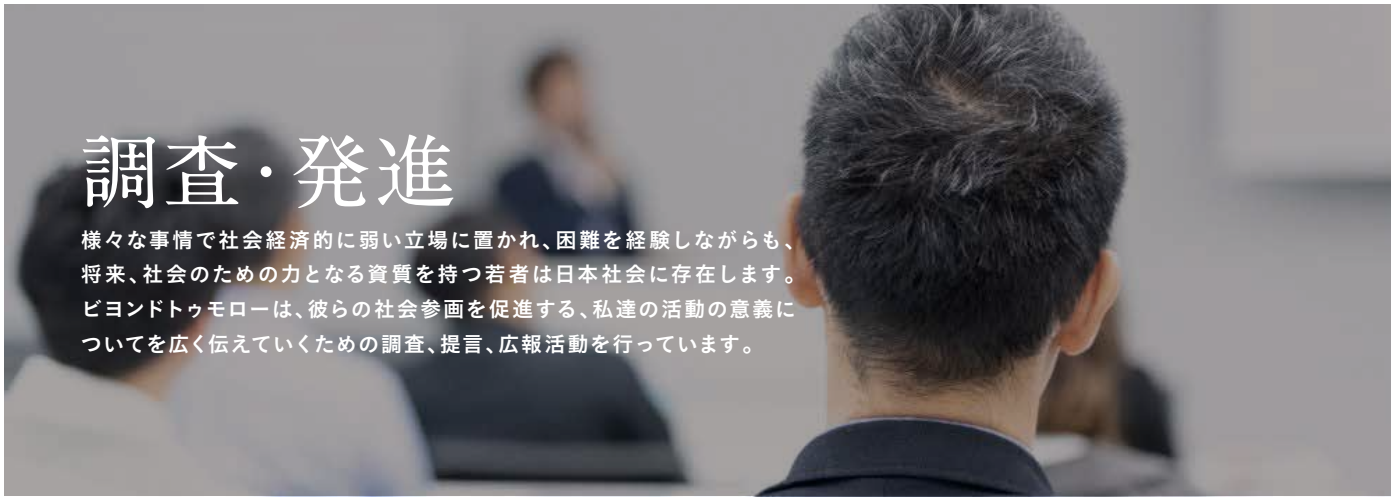
世界について学び、実際に訪問・滞在することで、その地域の社会課題について学び、世界の人とつながる機会を提供しています。発足以来毎年行ってきた、夏季米国サマープログラムや、タイやシンガポール、韓国などのアジア各国を訪れるアジアサマープログラム、欧州プログラムを実施しました。訪問国に対する理解や異文化での体験など、プログラム全体を通し、学生がキャリアの視野や選択肢を広げるためのサポートをします。

- ●米国サマー・プログラム
- ●アジアサマー・プログラム
- ●欧州サマー・プログラム　他

キャリア

企業訪問や職業体験、ゲストスピーカーによるセッションや仲間との対話で、自分の将来のビジョンについて現実的・具体的に考える機会を提供します。また、一連の活動を通し、自分のビジョンや将来のプランをプレゼンテーションしたり、チームで社会課題における政策提言の発表をしたりと、一人ひとりが発信する機会も多くあり、積極的に社会に関わり、表現することを学びます。

●スピーカーセッション
●キャリアセッション
●企業訪問　他



調査・発進

様々な事情で社会経済的に弱い立場に置かれ、困難を経験しながらも、将来、社会のための力となる資質を持つ若者は日本社会に存在します。ビヨンドトゥモローは、彼らの社会参画を促進する、私達の活動の意義についてを広く伝えていくための調査、提言、広報活動を行っています。

社会がどのように、逆境を経験した若者たちを登用し、
社会変革の旗手として活躍できる環境を整備していくのかというテーマを重視し、
社会全体で考えるためのプラットフォーム機能の構築を目指しています。

オピニオンシリーズ

2020年よりスタートした連載「オピニオンシリーズ」では、今なぜ、逆境にある若者を対象とした人材育成が必要なのかについて、様々な見地から検証しています。

連載第1回
逆境を乗り越えた人材が、
同質化された社会に
新たな価値観をもたらす

代表理事による講演活動

代表理事である橋本大二郎が、ビヨンドトゥモローの活動を紹介する講演活動を各地で行っています。

「困難を経験した若者たちに活躍の機会と場をつかんでもらうことが、社会全体の多様性や柔軟性を高めることにつながります。長い目で見たこれからの社会を、格差の広がる不寛容なものにしないためにも、ビヨンドトゥモローの取り組みが貢献できると考えています。」

VOICE

卒業生の声

ビヨンドトゥモローを卒業し、それぞれの道で夢を追う卒業生からメッセージをいただきました。ビヨンドトゥモローの目指すもの、それは「困難を経験した若者が共感力ある人材として成長し、社会の各所で活躍することで、寛容な社会を実現する」ことです。他者の痛みに想いを馳せる事のできる若者が、それぞれの地域で花を咲かせています。

①出身地
②ビヨンドトゥモローでの活動時期
③現在の仕事

「私は、家しか失っていないから…」
初めて参加したビヨンドで、
そう話す同年代の仲間に
頭を殴られるような衝撃を受けました。
何も失っていない自分が
ここにいて良いのか。
**必死に自分と
向き合った経験が**
今の自分を形作っています。

遠藤 真之
①福島県
②2014~2016年度
③ボストン コンサルティング グループ

ビヨンドにはいつも志が高くて
熱い想いを持った仲間
が集まっていて、
私の高校・大学時代で
とても刺激的な時間でした。
今も相変わらず
システム屋さんをしてますが、
ビヨンドでの経験が
今の仕事にも活きているなと感じます。
引き続きビヨンドの活動を
応援しています！

高橋 亜弓
①宮城県
②2013年度
③Chatwork株式会社

視野が広がっただけでなく、
**自分で未来を
切り開くための力が**
身につきました。
東日本大震災で多くを失いましたが、
仲間と共に人生を前向きに捉え、
多くの経験を積むことが出来ました。
各界のリーダーのお話は、
現職で社会貢献系の事業に
携わるにあたり、参考になりました。
震災でご支援いただいた皆様からの
御恩を社会に還元できるように
さらに頑張ります。

佐久間 楓
①宮城県
②2013~2015年度
③日本たばこ産業株式会社

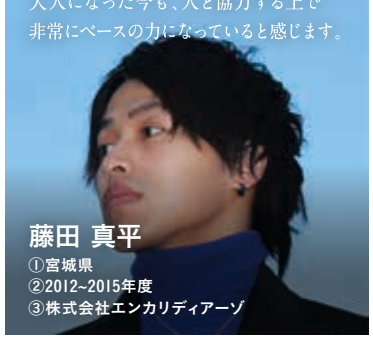
私は昨年から編集者として働き、
沢山の人に発信する言葉と
向き合っています。
ビヨンドで出会った皆さんが、
自らの経験と思いを、
慎重に選ばれた言葉によって紡ぐ姿を
思い出すにつけても、
私もまた、その向こうで
誰かが受け取る言葉
に対して真摯であらねばと
気が引き締まります。

佐藤 主樹
①宮城県
②2013年度
③株式会社プランディット

新聞記者として、地元岩手で働きます。
かつて悲しい経験をしましたが、
その経験が自分の核となっていますし、
あの経験がなかったら
「記者」の職は選んでいない
かもしれません。
ビヨンドの仲間と話す中で
**「自分だからこそ
伝えられることがある」**
と気づけたのは大きな体験でした。

町中 大悟
①岩手県
②2017~2018年度
③株式会社岩手日報社

スカラーシップ卒業生で
現在は俳優・タレント業をしております。
ビヨンドトゥモローでの思い出は
数知れずありますが、一番初めに参加した
「東北未来リーダーズサミット」の
記憶は今でも鮮明です。
人生であんなに
「人を理解する」時間
を過ごしたことはなかったですし、
限られた時間での提言作成は
大人になった今も、人と協力する上で
非常にベースの力になっていると感じます。



藤田 真平
①宮城県
②2012~2015年度
③株式会社エンカリディアーゾ

人の人生が変わる瞬間。
新しい世界に触れ、
成長し変化して行く仲間の姿を、
ビヨンドトゥモローを通して
見ることができた。
この経験は、
「人」一人ひとりの成長に伴走し、
**学びや変化の
きっかけの場を**
作って行きたいという夢となり、
現在の教育分野での
仕事にまで繋がっている。

白 河榮
①福島県
②2013~2016年度
③放課後NPOアフタースクール,谷中小学校
放課後子ども教室

看護師になって5年。
思わぬウイルスの登場で
試行錯誤の連続ですが、
医療者としてこの場にいられることを
誇りに思います。
BEYONDとの出会いは、
あの日の後悔を信念に変えてくれました。
無力さに立ち尽くした
10年前の姿があるから、
わたしは今、最善を尽くすことが出来ます。

福田 順美
①岩手県
②2012~2015年度
③看護師

震災を経験し、ビヨンドを通して
多くの出会いや思い出があります。
**泣くことが
弱いことではない**
ということ、
自分にもできると自信を持てたこと、
自分自身や考え方と向き合うこと。
様々なことを教えていただきました。
ここでの経験は
自分の強みになっていると思います。

福田 栞
①宮城県
②2015~2016年度
③株式会社ネクスコ・エンジニアリング東北

大学1年生だった私は、
様々な経験をした仲間たちと接し、
そのような人を前に
自分には何ができるのか
強く考えさせられました。
そして今、
医師として患者様と接する時、
当時のことを思い出し、
常に患者様自身が感じる痛みに
寄り添うことのできる
医師でありたいと考えています。

佐藤 慎
①岩手県
②2013~2015年度
③岩手医科大学附属病院 循環器内科医師

ビヨンドは
私にとって方位磁石。
ビヨンドに来ると、
置かれた環境に言い訳せず
挑戦している仲間の姿から、
自分の本当にやりたいことや
挑戦したいことに
気付くことができます。
そして、その人達から辛い境遇の
乗り越え方ではなく、
付き合い方を教えてもらい
人生が明るくなりました。

松藤 江巳吏
①高知県
②2016~2020年度
③株式会社技研製作所

ビヨンドを通じて、多くの人と出会い、
世界の広さを知り、
自分自身と向き合うことができました。
OBとなった今でも、
自分を支える大事な土台です。
これからも
何気ない日常を大切に
日々前向きに
歩んでいければと思います。

上澤 知洋
①岩手県
②2012~2015年度
③楽天グループ株式会社

インド勤務を経て現在は
経営者、超富裕層へのコンサル、
新規事業の立ち上げに奮闘中。
今の自分があるのも
ビヨンドがあったからこそ。
世間知らず、
英語もできなかった田舎者の自分が、
国内外で活動できている。
誰だって
きっかけさえあれば
挑戦し変われることに気付かされた。

菅野 翼
①福島県
②2012~2013年度
③デロイト トーマツ税理士法人

ビヨンドに参加して私の1番の変化は、
仲間ができたことだと思います。
共有した時間が1ヶ月も満たないのに、
私はみんなに
たくさん助けられました。
素敵な出会いがあったこと、
貴重な体験をさせて頂いたこと、
ビヨンドには感謝の気持ちで
いっぱいです。

谷 果純
①徳島県
②2017年度
③岡山県公立高等学校教員

ビヨンドトゥモローでの活動は
今の自分の原点です。
様々な立場で活躍する人との
出会いを通して
引っ張るだけが
リーダーシップの形
ではないということを学び、
自分なりの目標を
明確にすることができました。
今はその実現のため
博士後期課程にて
専門性を高めようと努力しています。

澤田 万尋
①宮城県
②2015~2016年度
③早稲田大学 基幹理工学研究科 博士後期課程

ここで得た学びは、
アナウンサーとして
相手の話に耳を傾け寄り添い、
目に見えない
物事の本質を捉える
ことの大切さを
いつも思い出させてくれます。
これまでの経験を生かして
今後はPRの仕事にも挑戦し、
二足のわらじで活躍していきます。

今井 友理恵
①岩手県
②2012~2014年度
③株式会社PR TIMES 広報,フリーアナウンサー

自分が心を開き、
信頼することで
相手も応えてくれるという学びを得ました。
仲間との濃密な繋がりや、
日頃会えない人に出会えた事も
貴重な体験でした。
IT系ベンチャー企業から今に至りますが
今後もこの業界で挑戦を続け
ITを駆使してビジネスを作る
経験を積んでいきたいです。

菅野 英那
①福島県
②2013~2014年度
③株式会社リクルート プロダクトマネージャー

小学1年生からバドミントンを始め、
今もオリンピック出場が夢であり、
日々練習に取り組んでいます。
スポーツを通して
元気や勇気、希望、夢を
発信することが最終目標です。
様々な分野に挑戦する
ビヨンドトゥモローの仲間や、
プログラムで様々な方に会えた
経験や繋がりは、
自分の考え方や価値観を
広げてくれる大切な存在です。

古賀 穂
①福島県
②2015年度
③バドミントン日本代表(2018~2020年)

様々な場所、人、経験をさせて頂き、
その時々で色々な感情や
新しい出会い、知識を頂きました。
過去の何者でもなかった自分にとっては
夢のような時間でした。
現在、ソフトウェアエンジニアと
ウェブプログラマーという職に
就く事になりましたが、
ビヨンドに出会う前の自分では
想像もできない未来
を歩むことができています。

大山 貴史
①愛媛県
②2016~2018年度
③株式会社テスク/ソフトウェアエンジニア,
個人事業主/ウェブプログラマー

REPORT

10年間を振り返って

創設メンバーの一人として、ビヨンドトゥモローの立ち上げから、支援対象を被災者だけでなく、日本全国の若者に広げた現在に至るまで、全てのプログラムの企画、実施に関わってきたマネージングディレクターの坪内南が、この10年間のビヨンドトゥモローの歩みを振り返ります。

坪内 南 MINAMI TSUBOUCHI

一般財団法人教育支援グローバル基金 ファウンダー/マネージングディレクター
マッキンゼー・アンド・カンパニー(東京)、AAR Japanカブール事務所(アフガニスタン)、世界経済フォーラム(スイス)、バーレーン経済開発委員会(バーレーン)等での勤務を経て、2011年東日本大震災を機に一般財団法人教育支援グローバル基金(ビヨンドトゥモロー)を創設。以来、逆境にある若者達への支援を続けている。慶應義塾大学総合政策学部卒業、マサチューセッツ工科大学都市計画修士。

被災地からリーダーを

2011年、日本を未曽有の危機が襲った。後に「東日本大震災」と名づけられることとなる、地震、津波、原発事故という一連の惨事を、私は遠く離れたバーレーン王国という中東の地で知ることとなった。被災地の状況を画面越しに見守るしかなかった私が被災地の人材育成の活動に身を投じるようになったのは、震災から数日後、前職の世界経済フォーラムでダボス会議の運営に携わっていたご縁から知り合った、10数名の企業経営者や政治家などと共に「被災地のために何か始めよう」とディスカッションを始めたことがきっかけだった。発起メンバーたちで毎週のようにミーティングを開き、どんな理念で何をしていくのか、熱のこもった議論が繰り広げられた。今ふりかえると、信じられないくらいのエネルギーでがむしゃらに走り続けた日々だった。

「自分に何ができるか」を問う機会

震災直後の被災地には、ただならぬエネルギーをもった若者たちがいた。震災で家族や友人を亡くしたり、自宅や学校を流されたりという想像もしていなかった悲しみを経験し、どこに向けていいのかわからない喪失感をただただ自分の内に秘めている彼らと出会うのは、震災から半年ほどが経った10月に東京で開催した「東北未来リーダーズサミット」でのことだった。あの3日間の感動・胸の高まりを、私は生涯忘れることはないと思う。3月11日というあの日から、全く違うものになってしまった世界の中でそれぞれに生きてきた若者たち70名が集い、悲しみをわかちあい、故郷のために自分たちに何ができるかを模索した。当時まだ母親の遺体がみつからず、絶望の中に生きていた学生が「死ぬことばかり考えていた私に、生きる希望を与えてくれたのは、このサミットで出会った仲間たち」とコメントしたり、避難所暮らしをしていた学生は「頑張れ東北とか頑張ろう東北とかって言われるけど、実際に私達が頑張れる場っていうのはこれまでなかった」とふりかえった。

その時点では、ビヨンドトゥモローがむこう何年間も組織的に続いていくという保証はなかった。だからこそ、「その瞬間を共に創りあげた」という熱気が場を包み、それがその後のビヨンドトゥモローを創っていく上での原点になったと思う。

起動力と持続力を支えたリソース

しかしながら、想いと熱意だけでは組織運営は続かない。組織を立ち上げ、継続させるためには、有形無形のリソースを確保する必要があり、多くの方々のお力添えをいただいた。今後の日本の市民社会の発展を願い、そのプロセスを記録として書き残したい。

❶資金

活動を始めるにあたっての必要な資金として、財団発足時に17名いた発起人たちで一人100万円ずつ出し合った。非営利活動の設立には様々な形があり、まずはボランティアでお金がかからない形で活動を始め、寄付を募っていくという方法もありえたが、全員が金銭的なコミットメントをもって設立に参画することで、この活動を必ずや成功させるという精神的なコミットメントを多くのメンバーから得ることにつながっていったように思う。資金繰りが苦しい状況での非営利組織の運営は、「資金を確保すること」が目的になってしまい、運転資金確保のために本来の理念に沿わない助成事業を実施したり、趣旨に合わない寄付金を受け入れてしまう危険性をはらむ。この10年間、理念から1ミリもずれることなく事業を継続することができたのは、ひとえに常に一定限の自己資金を担保することができていたからで、それは設立初期に発起人たちで私財を出し合ったという原点の思想を持続することができたからだと考えている。

そして立ち上げ期を過ぎて、事業の持続的な運営がチャレンジとなっていった時期においては、個人の篤志家の方々からの寄付が大きな力となった。返済不要の給付型の奨学金の支給を継続することの財

務的な負担は大きかったが、自前で運営する人材育成プログラムによる学びの機会だけでなく、高等教育の機会を通じて彼らが学びを得ることを応援し続けたかった。そんな奨学金制度継続への想いを支えてくださったのが個人の支援者の方々だった。奨学金制度を支えるためにとご寄付をくださる個人の方は年々増え、マネックスグループ株式会社取締役会長の松本大氏、株式会社ミクシィ取締役会長の笠原健治氏などの企業経営者から、何年にも渡ってご支援を継続いただけたことが制度を持続させる上で大きな力となった。

❷人材

財団を立ち上げた2011年6月、フルタイムでこの活動にコミットしたのは私一人だったが、すぐに井上裕太氏と阪本麻友氏が参画した。阪本氏は、ロート製薬株式会社からの出向という形で2年間勤務し、その後もロート製薬からは計4年間に渡り、社員の長期出向というご協力をいただいた。また2012年からは株式会社アルビオンからも社員の長期出向が始まった。被災地に足を運んでは現地の声を拾い、東京のオフィスでは夜中までその声を事業化するための会議や作業にあけくれ、時にぶつかりあい、涙をこぼしながら、全員が身を粉にして働き、ビヨンドトゥモローの原型をつくっていった時代だった。ゼロから事業を立ち上げる力強いスタッフたちの貢献がなければ、その後のビヨンドトゥモローは存在することはなく、力を添えてくれた全てのスタッフに感謝している。

❸米国とのパートナーシップ

設立後、資金もノウハウも不足する中、米国から寄せられた協力がビヨンドトゥモローの構築において大きな力となったことは筆舌に尽くしがたい。ジャパン・ソサエティー、米日カウンシル、フィッシュ・ファミリー財団、東北緊急援助基金ボストン、ルイジアナ州ニューオーリンズ震災基金など、多くの団体から、資金提供だけでなく、プログラム運営の際にそれぞれの団体の持つ人的ネットワークから協力者をご紹介いただいたり、セッションやイベントの企画を申し出てくださったり、また更なる資金集めのために寄付者をご紹介いただいたりというご協力をいただいた。米国の方々の情報収集や決定のスピードの速さは特筆するものがあり、設立直後、何の実績も持たなかったビヨンドトゥモローへの支援にあたり、非常に柔軟かつ迅速に対応していただいた。特に、ジョン・ルース駐日米国大使、アイリーン・ヒラノ米日カウンシル会長、櫻井本篤ジャパン・ソサエティー理事長、厚子・東光・フィッシュ フィッシュ・ファミリー財団創設者など、日米関係の強化のために重要な役割を果たしてこられた方々が、幾度となくビヨンドトゥモローの活動に足をはこび惜しみない支援をくださったことは、この時期の日米民間交流を語る上での重要な史実であると思う。また、ビヨンドトゥモローの活動が日本全国に展開する際には、日系アメリカ人の弁護士として両国の懸け橋として活躍された故村瀬二郎氏を慕う方々による村瀬二郎記念基金の運営をジャパン・ソサエティーと協働で行うことができた。こういった日米関係を軸とした連携により、ビヨンドトゥモローの活動は世界を見据えたものとして育っていった。その後、ビヨンドトゥモローの活動は、米国だけでなくアジアやヨーロッパでも活動を広げ、被災地の若者たちが民間外交の一翼を担う道筋が開けていくことになったが、それは初期にグローバルな視野を可能にしてくださった米国の支援者の存在があってこそであると考えている。

みえてきた課題、社会への意味合い

10年間にわたる活動の社会的な意義は多面的であるが、東日本大震災という非常時に始まった事業が、平時においても意義を発揮する事業として育っていったこと、そしてそのプロセスが民間主導で行われたということは大きな成果だった。緊急時に始まった事業が、そのミッションや方向性を変えることなく、平時においても意義を発揮することのできるものとして役割を果たすことは易しいことではなく、またその過程で「お上」や特定の利益や思想を代表する団体の意向におもねることなく、ミッション・ドリブン（理念ありき）の姿勢を貫くことは容易なことではなかった。それが可能であったのは、ひとえに「ミッション・ドリブン」という趣旨に賛同し、支えてくださった各方面の方々があってのことだったと思う。リソース不足で、明日の運営もおぼつかないような追いつめられた状況になっていたら、独立した運営体制を維持できえないこともありえただろう。

また、ビヨンドトゥモローの活動が長きにわたり色あせることなく鮮やかさを維持することができたのは、この活動が弱者救済に終始していなかったことが大きい。貧困や格差の問題の解決に取り組む団体が数多ある中で、ビヨンドトゥモローは、かわいそうな子たちを支援するということではなく、彼らの人生における困難は負の出来事ではなく、人生を豊かにするための糧になりうるということを、一人ひとりの人生に丹念に光を照らす作業によって実証していった。その過程がなかったならば、ビヨンドトゥモローはここまでの独自性を発揮する人材育成事業にはなりえなかったと思う。

最後に

今後、様々な形で、民間主導の取り組みが社会全体をよりよい場にしていく上で、ビヨンドトゥモローの事業構築の記録が何かの役に立てばこれ以上うれしいことはないと思っています。また、この10年間、ビヨンドトゥモローの活動に有形無形の形で力を添えてくださった全ての方々、そしてビヨンドトゥモローに出会ってくれた参加学生たちに、心から御礼申し上げます。最後に、私的なことではありますが、ビヨンドトゥモローは、私自身の人生を確実に実り多いものにしてくれました。ビヨンドトゥモローに携わっていなかったならば、苦労は少ない人生だったかもしれませんが、これ以上に自分の人生を真面目に生きることはできなかっただろうと、この数奇なご縁に深く感謝しています。

2011年の発足から、皆様の多大なるご支援・ご協力により、これまで様々な学生と出会い、その成長を見守ることができました。
奨学金や人材育成プログラムという機会を得て、参加した学生達のその後の人生は千差万別ですが、その後に歩く道に正否は無いと思っています。
これからもビヨンドトゥモローは寛容で多様な社会の実現に向けて、長い道のりを歩んでいきます。

プログラム参加者数

2011年の立ち上げから2020年度までに、ビヨンドトゥモローが実施した人材育成プログラムに一度でも参加したことのある高校生・大学生は3000人を超えました。東日本大震災の支援で始まった当初は被災した学生のみを対象としていましたが、その後支援の対象を広げ、現在では日本全国から学生が集まるようになりました。

3147人

（2011年〜2020年度）

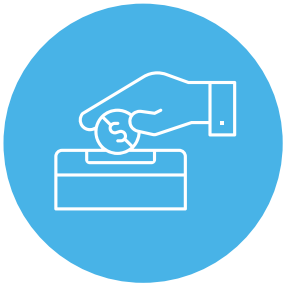
奨学生数

2020年度までに、149名の高校生、大学生に奨学金支給と年間を通じたリーダーシッププログラムを提供。毎年、数百の応募がある中から、面接を経た20名前後の学生に対し、国内、海外での研修や、奨学金支給、キャリアサポートなど、様々な機会を提供してきました。限られた人数にはなりますが、一人一人の成長に寄り添うサポートをしてきました。

149人

（2011年〜2020年度）

寄付額



ビヨンドトゥモローの発足以来、法人からのご寄付、個人の方々からのご寄付など、多くのご支援をいただき、全額民間からのご寄付によりプログラム運営を行うことができております。また、2020年度には初めて、遺贈によるご寄付もいただきました。

約6億3680万円

（2011年〜2020年度）

寄付者数

毎月継続してご支援いただいている企業様、個人のご支援者様に加え、Yahoo!募金ではTポイントでのご寄付を受け付けており、これまでの合計寄付者数は5千名を超えています。ビヨンドトゥモローをご支援いただける方が全国に広がっています。

5495人

（2011年〜2019年度）

代表理事
橋本 大二郎
元高知県知事

時には迷い、時には立ち止まりながら、初心を忘れず。

東日本大震災の翌年、東京で開かれたある会で、地震の当日、母親と避難する途中に津波に巻き込まれたという女子高生の生々しい体験談を聞きました。それが、私とビヨンドとの出会いです。その後、私自身も活動に加わる中で、支援の対象は、東北の被災地から全国に、さらには、貧困や虐待など厳しい環境のもとに暮らす子供たちの支援にと、活動の幅を広げてきました。この間、多くの温かいご支援のおかげで、国内・国外で積み重ねた人材育成のプログラムは、高い評価をいただいてきました。その結果、自らが置かれた境遇の中に閉じこもりがちだった若者に、気軽に話せる仲間がいることや、自分が活躍できる場がいくつもあることに気づいてもらう、かけがえのない居場所を提供することが出来たと思います。設立10周年を迎えたビヨンドトゥモローは、これからも、時には迷い、時には立ち止まりながら、初心を忘れずに活動を続けていきたいと思っております。

理事
木山 啓子
特定非営利活動法人ジェン（JEN）
理事・事務局長

理事
小林 正忠
楽天株式会社 常務執行役員
/ チーフウェルビーングオフィサー

ファウンダー・マネージングディレクター
坪内 南
一般財団法人教育支援グローバル基金

理事
本庄 竜介
グリーンコア株式会社 代表取締役

理事
村瀬 悟
メイヤー・ブラウン法律事務所 弁護士

評議員
羽生 善治
将棋棋士

評議員
宮城 治男
NPO法人 ETIC. 代表理事

評議員
山崎 直子
宇宙飛行士

監事
塩崎 彰久
長島・大野・常松法律事務所 パートナー弁護士

アドバイザー
阿川 尚之
同志社大学特別客員教授
慶應義塾大学名誉教授

アドバイザー
櫻井 本篤
前ジャパンソサエティーNY 理事長

アドバイザー
竹中 平蔵
慶應義塾大学 名誉教授、東洋大学 教授

団体名 一般財団法人教育支援グローバル基金
設　立 2011年6月
所在地 〒150－0046 東京都渋谷区松濤1-26-18 園ビルディング1F
メール info@beyond-tomorrow.org

W E B